



三渚コラム 中国「津津有味」-41

昨年来、チベットの自然に関する著作の監訳を引き受け、今年半ば、漸く出版の運びになりました。小山康夫さんという英語・中国語のみならず、チベット語にも堪能という稀有な訳者に恵まれたという僥倖もあったのですが、その本の監訳者まえがきで、チベットに絡め、最近の習近平政権の自然保護への取り組みを紹介しました。その大要をご紹介しますことは、現在の中国の自然保護を知る上で参考になりますので、主要部分をご紹介しますと思います。

1990年代に経済の高度成長期を迎えた中国では、人口増に関わる外部の批判をかわそうと穀物増産運動を進めた結果、自然破壊が急速に進行、1997年には黄河が下流の河南省で途絶え、山東省の済南では多くの泉が枯渇する事態さえ生じました。これを境に“退耕還林還草”（耕地を森林や草原に戻す）運動が起こったことは周知のとおりです。

しかし、それくらいで環境破壊が止まるわけもなく、2005年頃には全国的に酸性雨や表流水の汚染が広がり、胡錦濤政権は“以人为本”（人に優しい）を基礎とした、人と自然の“和諧社会”（調和のとれた社会）を目指す方針を掲げました。

2012年に総書記に就任した習近平は、今後の中国国土発展計画のマザープランとして＜全国主体機能区計画＞を策定、恵まれた生態を保持する地域が、その生態優位性をよすがにして他地域に負けない豊かな生活を手に入れるよう発展プランを整備する方針を打ち出した。

「“緑水青山”それ自体が“金山銀山”」という言葉は彼の考えをよく表しています。

恵まれた生態を保持する地域として特に注目されるのが、三江源流地域を抱える青海省、青藏高原を抱えるチベット自治区、雲貴高原を抱える雲南省などの西部諸省で、その貴重な植生や動物の存在は、中国のみならず世界的にも、種の保存や生物の発展史、更には地球の気候変動を探るといった面で実に貴重です。その中で特にチベット自治区が注目を浴びるのは、チベットの豊かな水系と稀に見る高低差を誇る溪谷や山岳が、各斜面・各高度・各溪谷・各湖沼で千変万化、あらゆる気候条件を網羅し、独自の生物分布を形成していることです。その中には氷河期にその特殊な地形で絶滅から救われた貴重な各種の原種も含まれています。

近年、中国政府は着実に環境政策を推進、2018年までに全国に設置された自然保護区は2750カ所、国家レベルの保護区は469カ所に達しています。しかし、その間一方で、生命の揺籃地とも言われる湿地の減少が急速に進み、2016年までの10年間では実に8.8%、340万haもの湿地が減少してしまいました。政府は2013年の立法を皮切りに、湿地の回復に本格的に取り組んでおり、2017年には「湿地保護修復制度プラン」を打ち出し、ここ数年、その成果が徐々に現れ始めています。

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



チベットでは2008年に「チベット生態安全保障壁保護と建設計画（2008-2030年）」が実施され、チャンタン高原にあり、260余りの湖沼を抱えるミディカ湿地は広大な湿地が蘇生し、現在、鳥類だけでも70種類以上が棲息、また、他の湿地でも、回復につれて年々渡り鳥の飛来が増加するなどの好ましい成果が報告されるようになりました。チョモランマ自然保護区では、積極的な取り組みが奏功し、代表的な動物であるユキヒョウの生息数が倍加したというニュースも報道されています。